

## 成人期の自己のとらえ直しに関する試論 —エリクソン理論のジェネラティヴィティを手がかりに—

永 田 彰 子

A Preliminary Discussion of the Reconsideration of Self in Adulthood:  
Discoveries from the point of Generativity based on Erikson's Theory

Akiko NAGATA

### 要 旨

人生における苦悩に直面した際の自己のとらえ直しのあり方について、本稿ではジェネラティヴィティの社会化を手がかりに考察した。すなわち成人期には苦悩を通して、限りある身としての自己が喚起されることが多くあり、そのような状況ではそれまでの自己では立ち行かず、新たに自己をとらえ直し、組み直すという再体制化の課題が繰り返し生じることをこれまでの研究を概観することによって指摘した。自己をとらえ直す際には、自分自身の人生においてそれを意味あることと捉えられるか否かという意味づけが重要になってくるといこと、さらにその意味づけには、「特定の閉じられた帰属集団」から「普遍化」という社会化への一定の発達的方向性があるということを概観した。

キーワード：自己のとらえ直し、ジェネラティヴィティ、社会化、Erikson.

### は じ め に

我々は本来、生きることに意味を求める存在である。長い人生を生きる中で、ふと自分は何のために生きているのだろうか、自分自身の存在価値はどこにあるのだろうか、自分の人生の意味とは何だろうかといった問いを考えることがある。こういった心の奥底から湧き出でてくる本質的な問いかけは、自分自身の価値を確認したいとの自己確認の問いである。

Frankl (1972) によると、人は死を目前にした時、自分の存在価値、自分の人生に意味を見出したいとの自己の確認欲求が高まるという。この自己確認の問いは、死を目前にした時のみならず、日々の日常のなかでも、これまでの自己では立ち行かない人生の困難な状況に遭遇した際に喚起されるのではないだろうか。それではこのような立ち行かない状況の中で人は自己確認の問いに対して自己をどのようにとらえ直していくのだろうか。本来、我々は心理社会的存在である。他者や社会との相互作用の中で日々生きている我々は自分の存在価値を、常に自己を取り巻く他者や社会との関わりの中で確認している。ではまず、自己をどのようなものととらえるから考えていく必要があるだろう。

本稿では、自己を、人間の生涯にわたるパーソナリティ形成の過程を定式化したErikson

(1950) の理論に基づいて考えてみたい。彼は生涯発達の視点にもとづく成人発達研究の発展に大きく貢献した第一人者であり、精神分析的個体発達分化の図式 (epigenetic schema) を示しながら発達論を展開した。この理論の中では、とりわけ注目を集めたのがアイデンティティという概念である。アイデンティティとは、幼児期以来形成されてきたさまざまな同一化や自己像が、青年期に取捨選択され再構成されることによって成立する、斉一性と連続性を持った自我の状態である。Eriksonによれば、アイデンティティの獲得は青年後期の課題である。しかしアイデンティティの問題は青年期以降もさまざまな心理・社会的変化を契機に問い直され、再吟味されて、さらに成熟していくものである (岡本, 1985)。

Eriksonが提唱した心理社会的発達理論においては、漸生原理の考え方に基づいて乳児期から老年期にかけてのライフサイクルを8つの発達段階に区分し、各段階の心理社会的危機を発達課題として定式化した (図1)。発達課題とはその個人が属する社会構造によって、何らかの伝統的な様式において規定され、準備された一連の選択や試練と定義される。

本稿では特に成人期の発達課題として示されたジェネラティヴィティに着目したい。晩年のEriksonの関心は、青年期のアイデンティティの問題から成人期のジェネラティヴィティの問題に移行していった (片瀬, 1983)。本稿においても、成人期の発達としてのジェネラティヴィティを手がかりに、成人期を生きる人々の自己のとらえ直しについて考察する。

1. ジェネラティヴィティとは何か

Erikson理論について考察した片瀬 (1983) は次のように述べている。

MATURITY								EGO INTEGRITY VS. DESOAIR
ADULTHOOD							GENERATIVITY VS. STAGNATION	
YOUNG ADULTHOOD						INTIMACY VS. ISOLATION		
PUBERTY AND ADOLESCENCE					IDENTITY VS. ROLE CONFUSION			
LATENCY				INDUSTRY VS. INFERIORITY				
LOCOMOTOR-GE NITAL			INITIATIVE VS. GUILT					
MUSCULAR-ANAL		AUTONOMY VS. SHAME, DOUBT						
ORAL SENSORY	BASIC TRUST VS. MISTRUST							

図1. 漸成図表 (Erikson, 1950)

個人はまず、青年期のアイデンティティ危機を克服することによって、独自の価値意識を獲得する。そして、成人期においては、この自分なりの価値基準に従って、今度は次の世代を育成するという課題に直面する。その際、重要なことは、自らのアイデンティティを次の世代に押しつけるのではなく、「より広いアイデンティティ」に立って次の世代を導くことである。なぜなら、後続する世代との相互作用をつうじて、「より広いアイデンティティ」を達成することこそ、成人自身が成熟した大人として社会化される要件だからである。こうして、成人は次の世代との相互作用をつうじて社会化されるのである。

つまり、青年期の発達課題であるアイデンティティは、成人期の発達に密接に関係しているのである。では、成人期、特に成人中期の発達課題であるジェネラティヴィティとは何か。Erikson (1950, 仁科訳 1977-1980, p.343) は、ジェネラティヴィティを「次世代を確立させて導くことへの関心」と定義したが、後に、Erikson & Erikson (1997, 村瀬・近藤訳2001.p.88) は以下のように再定義している。

成人期には、生殖性対自己一耽溺と停滞 (generativity vs. self-absorption and stagnation) という重大な対立命題が与えられている。この生殖性は、子孫を生み出すこと (procreativity)、生産性 (productive)、創造性 (creativity) を包含するものであり、(自分自身の) 更なる同一性の開発に関わる一種の自己一生殖 (self-generation) も含めて、新しい存在や新しい制作物や新しい観念を生み出すこと (ジェネレーション) を表している。

ジェネラティヴィティとは、子どもを産むという意味においての生殖性という狭義の意味内容も含め、次なる世代、新たな社会の構築に関わっていくということである。そしてこの“関わっていく”上で重要なことは、先にも述べたように、「自らのアイデンティティを他者に押しつけるのではなく、より広いアイデンティティにたつて次の世代を導くということなのである」(片瀬, 1983)。ということは、次世代に、他者に、社会にいかに関わっていくか、実践していくかの個人のあり方が問われることになる。これがジェネラティヴィティの問題なのである。

我が国においては、ジェネラティヴィティの訳語として「生殖性」(中西・佐方, 1987) や「世代性」(丸島, 2005; 丸島・有光, 2007; 中西・佐方, 2001など)、「世代継承性」(深瀬・岡本, 2010) が用いられており、また原語のまま「ジェネラティヴィティ」(小島, 2008; 串崎, 2005; 串崎, 2013; 相良・伊藤, 2017; 白井, 2015など) を用いている研究など、訳語は統一されていない。

## 2. 年齢軸からみたジェネラティヴィティの発達

従来の研究では、ジェネラティヴィティの得点が年齢に伴って増加すると指摘されており (Keyes & Ryff, 1998)、特に、中年期後期から老年期にかけての年代で最も高い得点であることが示唆されている (串崎, 2005; McAdams, de St. Aubin, & Logan, 1992.; 中西・佐方, 2001; 田淵, 2009)。例えば中西・佐方 (2001) は、8つの心理社会的課題の達成度を測定する尺度により、世代性<sup>1</sup>得点は男女ともに、中年期 (40歳代) から中年期後期 (50歳代) にかけて高い得点であることを報告している。親役割や生産性への貢献が減少する成人後期においても世代性が発達する可能性があるとして述べている。また、田淵 (2009) は、地域における学校図書ボランティア活動

<sup>1</sup>本稿では原語のジェネラティヴィティを用いているが、中西・佐方 (2001) は世代性を使用している。

に参加した中高年者を対象に調査を行った結果、30代は地域活動による関心が自身に直接的に関することのみにとどまるのに対し、50代以上の対象者では、次世代や他者、さらにはそれらを取り巻く環境などへの関心の移行が認められることを報告している。つまり自身の活動が将来的に次世代に影響力を持つことへの関心が年齢により変化、発達していくことを示唆している。

当然予想されることであるが、ジェネラティヴィティの概念範囲はどの年代でも等質ではない。この点について、Erikson & Erikson (1997) は、高齢期になると身体的な生殖性の喪失や責任ある公的地位からの退職により、次世代を育成することへの直接的な責任を超えた新たなジェネラティヴィティが芽生えることを指摘し、祖父母的ジェネラティヴィティと呼んでいる。

ジェネラティヴィティに「個」から「連帯」への移行の意味を見出したKotre (1984) は、ジェネラティヴィティを「自分の死後にも残るような生き方」への欲求としており、自身の活動が将来的に次世代に影響力を持つことへの関心と捉えている。つまり、自分の命や自己が生み出したものが象徴的に引き継がれているという実感が、老年期のテーマに対する取り組みを根底から支えるのである(串崎, 2005)。中高年者において、ジェネラティヴィティ得点の高い人は、心理的well-beingが高いとの報告(Aubin, & McAdams, 1995)は至極当然のことである。

### 3. ジェネラティヴィティの相における社会化の視点

本稿では、ジェネラティヴィティにおける社会化の側面に着目したい。そもそも社会化とは何か。誠心心理学辞典(2009)によると、個人が他の人々とのかかわり合いを通して、社会的に適切な行動及び経験のパターンを発達させる全過程を指す幅の広い用語として使われている。社会化の過程によって、個人は所属する社会ないし集団に適合した考え方や集団規範を学習して内面化し、それに基づいて所属する社会ないし集団に適応的な行動をとることができるようになるのである。この定義では適応主義的な観点が強調されているが、その他、これまでさまざまな観点から論じられてきている。本稿では「社会的な他者との相互作用によって生じる自己の変化の過程」(牧野, 1997)としての社会化に注目したい。ここで牧野(1997)はG・H・ミードの自我論に基づいて自己を捉えているが、一方本稿ではErikson (1950) 理論に基づいて自己を捉えているため、自己の変化の過程としての社会化は後者の立場の範囲内で考えていきたい。つまり、文化、社会的文脈も含めた対人的文脈の中での自己の変化の過程である。この文脈には直接的、間接的の両者の作用が想定される。

ところで片瀬(1983)は、エリクソンが示したジェネラティヴィティ概念における社会化を重要視し、さらに社会化の相互性の側面について次のように述べている。

エリクソン流の言い方をすれば、母親は子どもを社会化することによって、自らもジェネラティヴィティを獲得する。すなわち、「より広いアイデンティティ」<sup>2</sup>に立って次の世代を創出し、育成するという発達課題を達成する。

<sup>2</sup>片瀬(1983)は「より広いアイデンティティ」を次のように説明している。そもそもエリクソンはアメリカの民主主義の理念を高く評価する一方で、アメリカ白人の支配的地位にある集団としての自己の文化的優位を誇示するエスノセントリズム特有の心理機制に厳しい批判をしていた。その意味において、Eriksonの関心は、多元主義社会における「より広いアイデンティティ (wider identity)」の実現を主張する方向に向かっていたとしている。

つまり、「社会化とは、年長の世代から若い世代へと一方的に価値が伝達される過程ではない。むしろ社会化過程をつうじて両者が同時に変容される」。その意味において、「エリクソンの社会化の相互性という視点は、社会化場面に特有のダイナミックな相互作用過程を捉える上で重要な意義をもつ」。「例えば、親子関係の文脈で考えれば、親が養育によって子どもを社会化させていくという一方向的なプロセスのように捉えられがちであるが、実はそこには養育行動を通して親も社会化されていくという二次的社会化が成り立つのである」。親が我が子を子育てすることにより子どもの社会化を進めるが、子どもの社会化を進めることにより、親自身が親性を身に付け、家庭での親役割の遂行や地域社会での望ましい役割を果たしていくという親の側の二次的社会化がそこにはあるという視点である。

この二次的社会化の視点については、次に示すように幾つかの実証的研究においてその裏付けになる知見を確認できる。子育ての文脈においては、子どもを育てることによる親の人格的発達に関する実証的知見が見出されており（柏木・若松, 1994; 牧野, 1996）、さらに介護、看護の文脈において、ケアすることによって、ケアを受ける側のみでなく、ケアする側もまた発達していくとの実証的知見が見出されている（岡本, 1997, 1999; 渡邊・岡本, 2006）。

このように、エリクソンが指摘したジェネラティヴィティは、そのような育てる者、育てられる者、ケアする者、ケアされる者、両者の社会化の相互性が包含された概念であることを押さえておかねばならない。

以上の視点を踏まえると、ジェネラティヴィティにおける社会化という視点から成人期の発達を考えると、さらに次のような問いが喚起される。

成人期においては、子育てや介護のみならず、近親や自身の病気などさまざまな予期せぬライフイベント、困難な境遇に出会う。このような人生の危機としての予期せぬ出来事や受け入れがたい文脈の中で、人はこれまでの自分自身では立ち行かない状況に陥る。その状況を何とか乗り越えようとするとき、人はどのような心的作業を行っているのだろうか。Eriksonのジェネラティヴィティの視点を手がかりに考えれば、受け入れ難い困難な状況を自分自身にとって発達を一步前に進めるものであると捉えることができるか、自分自身を社会化させる文脈として捉えることができるかどうかが重要となるのであろう。つまり、困難な状況に遭遇したこと自体が自分にとって意味あることであると受け止めることができるかどうかという意味づけの視点である。

この意味づけの視点については、Eriksonのアイデンティティ論をもとにMarcia (1966) が提唱したアイデンティティ・ステータス論が参考になる。Marcia (1966) は人生の危機的場面での対処のあり方に関するEriksonの示唆を十分に考察した上で、アイデンティティ達成の測定には、危機 (crisis) と積極的関与 (commitment) の2つの基準が重要であるとした。前者の危機の視点が、自己に与えられた意味あることとして受け入れることができているかの内容であり、Eriksonの視点で発達を考えるとらえる際に不可欠の視点なのである。



#### 4. 自己のとらえ直しと再体制化

前項で述べた意味づけの視点は、自己のとらえ直しとどのように関係するのだろうか。成人期を生きる人が発達課題としてのジェネラティヴィティの相の社会化されるべき場において<sup>3</sup>、受け入れがたい困難なことが自己にとって意味あることと意味づけすることは、その状況に置かれた自己をとらえ直すということであり、とらえ直しにより自己は新たに更新されていくことが考えられる。

成人期における自己のとらえ直しを検討する上では、岡本（1985, 1994, 1997）の視点が有益である。岡本は一連の研究で、中年期以前に獲得されたアイデンティティが、中年期に崩壊あるいは動揺し、再び組み直されて安定した自己のあり方が形成されていく過程、つまりアイデンティティの再体制化の過程について論じている。中年期の危機の中で、自己の有限性を自覚することによって、心の深いところから浮かび上がってくる自己への問いに対する真摯な内省と自己探求から、新たに自己のあり方が再び組み直されていくという。さらに、岡本の再体制化の視点を他者との関係の中での自己のあり方に応用した永田（2002）は、関係性の再体制化を示唆している。中年期危機における心身の諸変化は、個人内の次元にとどまらず、他者との関係そのものやそれらの関係のなかでの個人の他者へのあり方においても、さまざまな対人経験により影響を受けたり修正されたりしていることが考えられ、そのような関係の中での自己のあり方は、組み直され続けていくことを報告している。

確かに、心理社会的存在である我々においては、自己の組み直しという作業は、他者との関係のなかで直接的、間接的に作用しあいながら行われるということが前提となるだろう。さらにその組み直しは、一度行われれば終わりという性質のものではなく、さまざまな苦悩に出会うたびに新たに組み直され、再体制化され続けるものであり、成人期のジェネラティヴィティの相においては、次第に普遍的社会性を獲得するという1つの発達の方向性があると整理できる。

#### 5. ジェネラティヴィティにおける社会化の概念範囲の拡大

西平（1993）は、Eriksonが示唆した成人期におけるさまざまな人生の問題を「自我にとって意味ある他者」の展開として捉えたことについて、次のように述べている。

「より広いアイデンティティ」の問題、つまり「意味ある他者」や「帰属集団」を広げてゆくという仕方ではアイデンティティの閉鎖性・排他性を乗り越えてゆき、最後に「人類全体」を「意味ある他者」とし、「我が種」として受け入れるまでに、最大限包括的になってゆくという道筋が、自我発達の延長線上に語られていたということである。それはもはや、発達事実というよりは、倫理思想の領域であって、アイデンティティの発達という視点は、人の発達事実の中から紡ぎだされた倫理的な価値方向性を指し示す、一つの大きな思想として展開されているということなのである。

<sup>3</sup>成人期を生きる人が発達課題をジェネラティヴィティの相において社会化の場で実現すべきことととらえる時、受け入れがたい困難なことを自己にとって意味あることと意味づけすることは、その状況に置かれた自己を社会の中で位置づけ直しとらえ直すということの端緒となるであろう。このとらえ直しによって自己は更新されていくのだと考えてよいだろう。

また永田・岡本（2005; 2008）は、成人中期におけるアイデンティティ発達論をもとに、重要な他者との関係の中での関係性の発達論を示し、Eriksonが指摘した拡大の視点と同様の指摘をしている。この研究では、関係性を「他者との関係の中で構築される自己のあり方」と定義している。そして、関係性発達の視点として、人生における重要な他者との関係において経験する個人にとっての危機が、自分自身の人生にとって意味あることと主体的に捉えることができるか否かという「主体的位置づけ」の視点と、危機を主体的に位置づけることができた結果、新たに構築された自分自身のあり方が、「コミットメントの普遍化」として、重要な他者との関係以外に広がりを持ち、日々の関係に反映されていくということを指摘している。つまり、コミットメントが重要な他者としての特定の閉じられた「帰属集団」のみへの反映ではなく、そこを乗り越えて普遍化されるという異なるパラダイムへの展開の視点を示している。併せてこの研究では、「主体的位置づけ」から「コミットメントの普遍化」への関係性の発達の方向性が指摘されている。先述したように、Eriksonも成人期から老年期にかけて、重要な対人関係の範囲が、「（分担する）労働」と「（共有する）家庭」から「人類」「私の種族」へと拡大すると指摘しており、社会化の拡大（社会性の普遍化）の方向性に矛盾はない。

一方で、筆者はここで、上記の「特定の閉じられた帰属集団」から「コミットメントの普遍化」への対人的文脈の広がりという方向性について着目したい。これまでの発達心理学研究で示されてきた視点を踏まえれば、拡大の方向性としての指摘としては妥当であるが、個人内の意味づけプロセスをもう少し丁寧にみるとどうだろうか。「特定の閉じられた帰属集団」での「主体的位置づけ」がない、つまり十分な意味づけがなされないまま、自我の弱さに直面するからこそむしろ自我を確認したいという欲求が高まり、より多様な他者と関わりを求めることで自己の安定を図ろうとするケースも考えられるかもしれない。これに関連して串崎（2005）は、自分の命や自己が生み出したものが象徴的に引き継がれているという実感が、老年期のテーマに対する自己の取り組みを根底から支えるということを指摘している。この指摘は、次のような仮説を喚起させる。それは、自我の強さでもって「特定の閉じられた帰属集団」のなかで意味づけがなされ、その後、コミットメントの対象である重要な対人関係の範囲が“広がる”という経過をたどるのではなく、対人的対象の広がり先行して、自己が支えられ、その中で自己が不死の感覚を確認することができ、自己価値が再確認されるからこそ、真に自己の課題に向き合うことが可能となり意味づけが行われるという経過をたどる可能性もあるのではないだろうか。つまり、発達した上位の自我の強さが先行するコミットメントの普遍化ではなく、むしろ自我の弱さに個人が直面するからこそ自我を確認したいとの確認欲求の結果としてのコミットメントの普遍化であり、コミットメントの普遍化を通して、自分自身への人生への意味づけが行われるという視点である。

従来の研究で示されてきた社会化の概念範囲の拡大については、そのプロセスの個人差を分析することにより、自己のとらえ直しのあり方が、遭遇する困難な状況の文脈によって違いが生じるのか、個人のパーソナリティによる反応の仕方によって違いが生じるのかなどの観点も今後視野に入れて検討することが必要ではないだろうか。

## お わ り に

本稿では、人生における苦悩に直面した際の自己のとらえ直しのあり方について、ジェネラティヴィティの社会化を手がかりに考察した。これまでの研究を概観することにより、成人期には苦悩を通して限りある身としての自己が喚起されることが多くあり、そのような状況では、それまでの自己では立ち行かず、新たに自己をとらえ直し、組み直していくという再体制化が繰り返し生起するということを確認した。また自己をとらえ直す際には、自分自身の人生において意味あることと受け止めることが出来るか否かという意味づけが重要となってくるとということ、さらにその意味づけは、「特定の閉じられた帰属集団」から「普遍化」という社会化への一定の発達的方向性があるという視点を概観した。これらの観点を実証的に明らかにするためには、成人期の苦悩を生きる対象者の実相に触れる綿密な聞き取り調査が求められるだろう。成人期の発達課題であるジェネラティヴィティを測定するものとして、Bradley (1997) と Bradley & Marcia (1998) によりジェネラティヴィティ・ステイタス・インタビューが開発されている。しかし、自己のとらえ直しプロセスの個人差を検討する際に、一様のステイタスを想定してとらえる枠組みが有効であるのか、もしくは別の分析枠組みの開発が必要なのか。これについては今後の課題としたい。

## 引 用 文 献

- Aubin, E., & McAdams, D. P. (1995) The relations of generative concern and generative action to personality traits, satisfaction/ happiness with life and ego development. *Journal of Adult Development*, 2, 99-112.
- Bradley, C. L. (1997) Generativity-stagnation: Development of a status model. *Developmental Review*, 17, 262-290.
- Bradley, C. L. & Marcia J.E. (1998) Generativity-stagnation: A five-category model. *Journal of Personality*, 66, 39-64.
- Erikson, E. H. (1950) *Childhood and society*. New York: Norton.  
(エリクソン, E.H. 仁科弥生 (訳) (1977, 1980). 幼児期と社会1, 2 みすず書房)
- Erikson, E. H., & Erikson, J. M. (1997) *The life cycle completed. Expanded ed.* N. Y.: W. W. Norton.  
(エリクソン, E.H. / エリクソン, J.H. 村瀬孝雄・近藤邦夫 (訳) (2001, 2013) ライフサイクル、その完結<増補版> みすず書房)
- 深瀬裕子・岡本祐子. (2010) 中年期から老年期に至る世代継承性の変容. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 59, 145-152.
- Frankl, V. E. 著 (1972) / 山田邦男監訳: 意味への意志. 春秋社, 32, 2002.
- 柏木恵子・若松素子. (1996) 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 片瀬一男. (1983) E・H・エリクソンにおける二次的の社会化への視点—ライフ・サイクル論の意義をめぐって—. 社会学評論, 34, 254-269.
- Keyes, C.L., & Ryff, C. D. (1998) Generativity in adult lives: social structural contours and quality of life consequences. In: D.P.McAdams and E. de St Aubin, Editors, *Generativity and adult development. How and why we care for the next generation*, APA, Washington, DC.
- 小島真紀子. (2008) 成人期における就業・子育てとジェネラティヴィティとの関連. 日本教育心理学会総会発表論文集, 50, 732.
- Kotre, J. (1984) *Outliving the self: Generativity and the interpretation of lives*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, Pp.227-263.



- 串崎幸代. (2005) E・H・Eriksonのジェネラティビティに関する基礎研究—多面的なジェネラティビティ尺度の開発を通して—. 心理臨床学研究, 23, 197-208.
- 串崎幸代. (2013) ケアの与え手に必要な心理的要因について—ジェネラティビティを支えるもの—. 千里金蘭大学紀要, 10, 79-83.
- 牧野暢雄. (1996) 父親にとっての子育て体験の意味. 牧野カツ子・中野由美子・柏木恵子 (編) 子どもの発達と父親の役割. ミネルヴァ書房. Pp.50-58.
- 牧野紀之. (1997) 個人内過程からみた社会化の理論. 大阪大学教育学年報, 2, 121-130.
- 丸島令子. (2005) 世代性尺度の作成：盛大性の関心と行動モデルの測定. 心理臨床学研究, 23, 422-433.
- 丸島令子・有光興紀. (2007) 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討. 心理学研究, 78, 303-309.
- Marcia, J. E. (1966) Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- McAdams, D.P., & de St. Aubin, E. (1992) A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts and narrative themes in autobiography. *Journal of personality and Social Psychology*, 62, 1003-1015.
- 永田彰子. (2002) 関係性からみた生涯発達. 岡本祐子(編著) アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房 Pp.121-147.
- 永田彰子・岡本祐子. (2005) 重要な他者との関係を通して構築される関係性発達の検討. 教育心理学研究, 53, 331-343.
- 永田彰子・岡本祐子. (2008) 重要な他者との関係を通して構築された関係性様態の特徴—信頼感およびアイデンティティとの関連—. 教育心理学研究, 56, 149-159.
- 中西信男・佐方哲彦. (1987) 成人期の同一性の発達に関する研究 (2) —EPSIとEFIとの関連から—. 日本心理学会第51回大会論文集, 550.
- 中西信男・佐方哲彦. (2001) EPSI—エリクソン心理社会的段階目録検査—. 上里一郎 (監) 心理アセスメントハンドブック (第2版) 西村書店. Pp.365-376.
- 西平 直. (1993) エリクソンの人間学. 東京大学出版会.
- 岡本祐子. (1985) 中年期の自我同一性に関する研究. 教育心理学研究, 33, 295-306.
- 岡本祐子. (1994) 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究. 風間書房.
- 岡本祐子. (1997) 中年期からのアイデンティティ発達の心理学. ナカニシヤ出版.
- 岡本祐子 (編著). (1999) 女性の生涯発達とアイデンティティ. 北王子書房.
- 相良順子・伊藤裕子. (2017) 中年期におけるジェネラティビティの構造とジェンダー差. パーソナリティ研究, 26, 92-94.
- 誠心心理学辞典. (2009) (編) 外林大作・辻 正三・島津一夫・能見義博. 誠信書房.
- 白井利明. (2015) 中年期のジェネラティビティとアイデンティティの関連についての研究課題—青年期との関連も視野に入れて—. 大阪教育大学紀要, 63, 65-71.
- 田淵 恵. (2009) 中高年者による若年世代支援プログラムにおける関心とその年齢差：世代間交流とジェネラティビティの視点から. 生老病死の行動科学, 14, 3-12.
- 渡邊照美・岡本祐子. (2006) 身近な他者との死別を通した人格的発達：がんで近親者を亡くされた方への面接調査から. 質的心理学研究, 5, 99-120.

[2018. 9. 27 受理]

コントリビューター：加藤 敏之 教授 (児童教育学科)

